

東北大学実践宗教学寄附講座 ニュースレター

Department of Practical Religious Studies
Graduate School of Arts and Letters

第6号 2014年10月1日

目次

学会・研究会参加報告	6-7頁
第5回臨床宗教師研修報告	8-9頁
第5回臨床宗教師研修受講者の感想	10-14頁
研修受講者インタビュー	15-16頁
修了生の活動・各地の動き	17頁
活動報告	18-19頁

特別寄稿

沼口 諭（医療法人徳養会 沼口医院）
これからの日本の医療における
臨床宗教師の役割（意義）・・・2-4頁



特別寄稿

三浦紀夫（NPO法人ビハーラ21）
「一般社団法人臨床宗教師・
ビハーラ協会」の設立について・・・4-5頁



臨床宗教教育ネットワークについて

2014年7月21日、上智大学グリーンケア研究所、龍谷大学実践真宗学研究科、そして東北大学実践宗教学寄附講座との間で、「臨床宗教教育ネットワーク」の発足が合意された。宗教性あるいはスピリチュアリティを基礎としてケアに従事する人材の養成プログラムを持ち、大学内に設置された三つの機関が、それぞれのプログラムの特徴を活かしながら協力関係を築き、情報交換を続けていくための足がかりとなるものである。

この他、鶴見大学先制医療研究センター、高野山大学、種智院大学などが新たに臨床宗教師養成に動き出している。また、臨床仏教研究所による臨床仏教師養成プログラムも第2期を迎える。こうした動きは宗教者養成プログラムの乱立現象とも見えるが、むしろ超高齢多死社会の到来という共通する課題に向き合い、宗教（者）と

いう社会資源を有効に活用すべきではないかという共通認識に立ったひとつの流れであると考えたい。

すでに3月に、現場に立つ臨床宗教師同士のネットワークとして「臨床宗教師会」が発足しており、9月には「一般社団法人臨床宗教師・ビハーラ協会」が設立された。こうして、研究・教育と医療・福祉の現場が相互に交流し、臨床宗教師の社会実装を実現するための体制がまた一步、整いつつある。広く社会の中に理解を求めながら、新たな課題を見据えていきたい。

2014年10月 実践宗教学寄附講座



第5回臨床宗教師研修より（名取市関上あんどん松付近）

これからの日本の医療における 臨床宗教師の役割（意義）



医療法人徳養会沼口医院
院長 沼口 諭

はじめに

私は真宗大谷派の寺院に生まれた僧侶であり開業医です。医院は無床診療所で、午前・午後の外来診療と訪問診療を行い、訪問看護ステーションと居宅支援事業所を併設しています。私の仕事には医師会での活動もあり、理事として行政を含めた多職種の方々とともに介護保険や在宅医療などを通して地域医療のサポートをしています。同時に、僧侶としての仕事も僅かではありますが、代務の住職さんにお手伝いいただき行っております。

現在、私の医院において平成25年の秋（第4期）から、臨床宗教師の実習生の方を受け入れ一緒に学ばせてもらっています。

故岡部健先生の思い出

在宅医療は父のあとを継いで20年近く行っていましたが、5年程前から在宅緩和ケアを真剣に取り組むようになったとき、医師でもあり僧侶の自分は死生学を学ぶ場を求めていました。そんな時に、東京大学で開かれていたグローバルCOE・医療・介護従事者のための死生学講座に参加するようになり、2012年1月28日に開かれた冬期セミナーで岡部健先生の「死生観と被災者ケア―被災地における在宅ケアに取り組んで」というテーマで講義を受けました。

それ以前から岡部先生は在宅医療をしている医師なら誰でも知っている有名な先生でしたが、死生学というテーマでお話を聴いたのは初めてでした。先生の講義が終わった後のコーヒブレイクの時間に、私は「医師であり僧侶でもある自分が今の医療に漠然とした疑問を持ちながら仕事をしていること。岡部先生が話されたお迎え現象と看取りの話が自分の疑問に対す

る答えを出すための方向性を与えていただいた」ということを岡部先生に話すと、先生から「今の医療に宗教は必要なんだよ」「今、東北大学で被災地や緩和ケアの場で活躍できる宗教者を臨床宗教師という名前で養成しようと立ち上げているところなんだ」とお話をしていただきました。初対面でしたが、私が医師であり僧侶でもあるということから、興味を持たれてお話をいただいたと想像します。

その時の私には、臨床宗教師の具体的な像は解りませんでした。

実習生の受け入れを決断した理由

私が臨床宗教師の実習をお引き受けすることを決断した理由を、ちょっと説明させていただきます。一つは冒頭にも書きましたが、医師と僧侶という2足の草鞋を履いているということです。

2013年7月、ご縁があつて龍谷大学大学院の実践真宗学の学生さんから当院の在宅医療の現場で研修したいという申し出があり、3人の院生と一緒に在宅医療における宗教者の意義を学ぶ機会をいただきました。それまでもビハーク活動には医師としても宗教者としても関心がありましたので、とても有意義な経験となりました。その後、2013年7月長崎で開催された日本ホスピス・在宅ケア研究会で谷山洋三准教授から臨床宗教師のお話があり、私の尊敬する故岡部健先生が立ち上げられた東北大学のプロジェクトでもあったので、実習生の受け入れをお受けすることにいたしました。岡部先生とお会いして1年半が経つてのご縁でした。

もう一つの理由は、これからの日本の医療、地域再生には宗教者の参加が必須だと考えるからです。



地域包括ケアシステムと宗教者

私個人の話が長くなりましたが、なぜこれからの日本社会に臨床宗教師が必要なのか？私見を述べたいと思います。

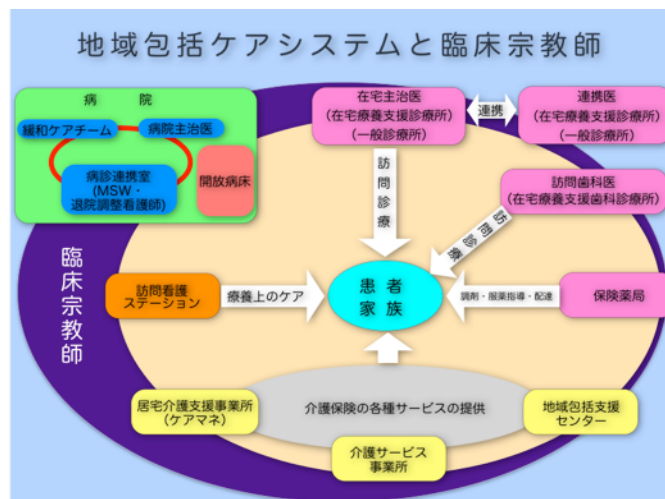
皆さんご存知のように、日本は2007年に「超高齢社会」（65歳以上の人口が21%を超えた社会）に突入しました（因に、2013年9月現在25%を超えました）。今後は「多死社会」が訪れることになるため、厚生労働省を中心とした国は施策として、地域包括ケアシステムの構築を打ち出しました。その狙いの一つは、8割弱の方が病院で看取られている現状を今後も続けていくことが困難なため、在宅や施設での看取りを増やすことにあります。それに伴い、地域医療のシステムも今までの病院完結のシステムから在宅医療を中心とした地域全体を病院と考えるような地域包括ケアシステムに変わろうとしています。

私はそのような日本の医療システムの変革の時期における臨床宗教師の存在意義は、多職種連携にあると考えています。地域包括ケアシステムの重要なコンセプトとして、①住み慣れた場所で自分らしく過ごす「生活の質」の重視、②多職種協働による在宅医療の支援体制の構築があります。

もともと寺院や神社などの宗教施設は、地域のコミュニティの社会・文化面で中心的な役割を果たしていました。現在は過疎化や人間関係の希薄化からそのようなコミュニティが崩れつつありますが、地域再生という観点から今までのあるいは新たなコミュニティの再構築が必要です。そして、これからの超高齢社会においては医療や介護のないところに人は住めませんから地域再生の中心には在宅医療チームが必要と考えますが、そのメンバーとして医療や介護従事者のみならず宗教者も加わることが必要だと思います。つまり、この在宅医療チームは医師、訪問看護師、ケアマネ、薬剤師、歯科医師、ヘルパー、地域包括支援センターの職員、民生委員などの多職種で構成されているのですが、その中に僧侶や神官などの宗教者も入らないといけないと思うのです。

今までも、例えばお寺のご住職で民生委員などとして地域に関わっておられる宗教者と在宅医療チームが情報共有することはありましたが、これからは、特に在宅医療でも緩和ケアが必要なケースこそ、よりスピ

リチュアルケアの素養のある宗教者に加わってもらうことが重要だと感じています。



医療現場に求められる公共性

では、在宅において終末期にある人にケアを提供する場合を考えたとき、その現場に関わる宗教者に求められるものは何か？宗教者にとってその患者さんが以前から檀家さんなど関わりのある方であれば、病院に行くよりは在宅へ行く方が関わり易いと思います。しかし、臨床宗教師として病院であれ在宅であれ医療の現場に出向く時には、公共性が求められます。特に日本における病院は、無宗教と自称される方を含めていろいろな宗教観を持った方が同じ場で治療を受けておられるため、より強い公共性が求められます。

また、医師や看護師などは科学的根拠を基に結論を積み上げて行くEBM(Evidenced Based Medicine)重視の学問大系の中で教育され、なおかつ今の日本人の特徴でもある宗教に関心の低い人が多く、場合によっては宗教アレルギーのような方もおられるので、ホスピスにおけるチャプレンの様な方を除き今まで宗教者は遠ざけられてきました。

もっとも最近では、高齢者を中心とした終末期医療に関わる医療者を中心に宗教の重要性が少しずつ認められつつあることも事実ですが、現段階では例えば袈裟・衣という僧侶の装束で一般の病院に行こうとする、疎まれるのも現実です。

そのような現状を考えたとき、臨床宗教師の資格を持つということは、布教を目的とせず、スピリチュアルケアの能力を持つ宗教者であるということの証明になり、医療者からも受け入れられ易くなると思います。そういう意味でも、今後の臨床宗教師の活躍

がこれからの医療現場で注目されていますし、期待もされていると思います。

臨床宗教師、宗教に対する期待

今の日本社会においては、我々の生と死というものが、いろんな意味で医療に絡め取られて、その枠内でコントロールされているという現状があります。しかし、生と死を「いのち」という視点で考える時、医療においては死を点で捉えそのみを見る傾向がありますが、連続性のなかで考えなければならないと思います。そのような環境だからこそ今の医療の現場にはスピリチュアルペインが多く生まれているのでしょう。

死に到る前（エンドオブライフ）のプロセスにどのくらい宗教者が関わり、そのスピリチュアルペインに寄り添えるのか？それは何も看取りとかそういうことだけではなく、人々の日常生活の中の色々な問題に、宗教者なりにできるところで関わっていくという姿勢が重要なのではないのでしょうか。

今は死ぬまでは全部医療の領域で、宗教は死んでからが出番というような形態が社会通念になっています。そして、生も死も含めて人間が実際に生きる現実には細やかに寄り添っていくという姿勢自体が、医療の側にも欠けていますし、宗教の側もないがしろにしてきたのではないかと思います。しかし、臨床宗教師が生も死も含めた人間が実際に生きる現場で活躍することによって、地域社会が蘇って日本が再生し、生きる意味を見失った日本人が人間性を回復するものと信じています。さらに、社会通念をも変えていくような社会変革の旗手としての役割も期待しています。

今後の当院の役割

私の役目は臨床宗教師の方々と医療・介護の現場を繋ぐお手伝いをする事です。そのような考えから、平成26年4月より当院では臨床宗教師を専門の職員として採用しました。これからの臨床宗教師の将来を考えると、ボランティアではなく社会における一職業人として認められなければいけません。今後はそのような活動も行っていくつもりです。医療・宗教の目的である人々の幸せのために臨床宗教師の方々と一緒に学び、仕事ができれば幸いと思っています。

「一般社団法人臨床宗教師・ビハーラ協会」の設立について



NPO法人ビハーラ21
理事 三浦紀夫

1. はじめに

今年9月25日に「一般社団法人臨床宗教師・ビハーラ協会」を設立登記いたしました。宗教的ケア・スピリチュアルケア（以下、宗教的ケア等という）の提供を必要としている医療機関・福祉施設（以下、医療機関等という）からの要請に応じていきたいと考えております。この場をお借りしまして、関係各位にご報告申し上げたいと思います。

2. 設立趣旨

「患者の権利に関する世界医師会リスボン宣言」というものがあります。1981年に世界医師会総会にて採択され、その後何度かの修正を経て今日にいたります。当然、日本医師会においても重要な概念との認識があるでしょう。そこで宣言されている11項目の患者の権利には、「尊厳に対する権利」「宗教的支援に対する権利」というものがあります。それはまさに、患者には宗教的ケア等を受ける権利がある（もちろん拒否する権利もある）という、医師の立場からの宣言であります。欧米ではこの患者の権利を擁護するために、チャプレン（chaplain、病院付牧師）という専門職は欠かせないものなのでしょう。しかし、我が国の現状では、そういった宗教者を職員として配置している医療機関等は稀であります。医師や看護師の中にはその必要性を感じている人も多いでしょうが、医療機関等の制度上なかなか実現が難しいのが現状ではないでしょうか。あるいは、欧米のチャプレンのような人材がほとんど存在しないという方が最大の問題点かもしれません。そういう現状をふまえ、東北大学では、日本版チャプレンともいえるべき「臨床宗教師」を養成する講座を開きました。人材養成の動きは他大学へも広がりを見せており、専門職が育つ環境は整いつつあり

ます。そこで、実際の現場での活動をサポートするための組織として、当協会の設立へと至りました。

3. 概要

◆所在地

本 部 岐阜県大垣市笠木町650番地 沼口医院内
事務局 大阪市平野区瓜破西2丁目15番32号 ビハー
ラ21内

◆設立時役員

代表理事 沼口 諭（沼口医院院長）
理事 西岡易子（NPO法人ビハーラ21理事長）
理事 三浦紀夫（NPO法人ビハーラ21理事）
監事 杉野 恵（NPO法人ビハーラ21理事）

◆目的

「患者の権利に関する世界医師会リスボン宣言」にて表明されている「尊厳に対する権利」「宗教的支援に対する権利」を積極的に擁護しようとする医療機関及び福祉施設に対し、臨床宗教師、ビハーラ僧、チャプレン等の専門職を派遣することを通じ、思想及び良心の自由、信教の自由又は表現の自由の尊重又は擁護に寄与することを目的とする。

◆事業内容

- 1) 調査研究事業 —リサーチ(research)—
 - ・医療機関、福祉施設での「尊厳に対する権利」「宗教的支援に対する権利」に着眼した調査研究を行う。
 - ・その報告をもって、厚労省、医師会などへの働きかけを行う。
- 2) 教育研修事業 —トレーニング(training)—
 - ・東北大学臨床宗教師研修及び同等以上の研修・講座の修了生を対象に、実践的トレーニング場所の提供及び指導を行う。
 - ・同等研修を受講できない宗教者等を対象にしたテキストの編纂・販売を行う。
 - ・実習場所の維持管理を行う。
- 3) ケア提供事業 —マッチング(matching)—
 - ・スピリチュアルケア、宗教的ケアの提供を必要としている医療機関、福祉施設等に対し、臨床宗教師等の派遣を行う。

4. 概要の解説

この法人は、しっかりとしたスキーム（枠組みをもった計画）を立てて会員を募るものではありません。「まず設立ありき」で、ビハーラ21のメンバーが行動したものです。だから、賛同者が少なければ、ビハーラ21（岐阜県の沼口医院含む）からスピリチュアルケア部門が独立しただけの法人になってしまいま

す。逆に賛同者が多くなれば、ビハーラ21の積み重ねてきた実績をシェアして、全国各地でそれぞれの特色を活かした臨床宗教師の活動へ発展する可能性もあります。そんな柔軟な可能性をもって設立した法人であります。この原稿がニュースレター第6号に掲載される頃には、既に何らかの変化が起きているものと期待しています。

5. 本部と事務局について

この法人の本部は、岐阜県大垣市の沼口医院内に置いています。平成26年9月の時点ではまだ設計段階ですが、この法人の本部機能（事務所、研修室、カフェ・デ・モンクなど）を兼ねそなえた「メディカルシェアハウス」の建設が予定されています。また、事務局は大阪市のビハーラ21内に置いております。こちらは既に稼働している「ビハーラ住宅」（平成25年7月、12月にそれぞれ竣工した2棟）をはじめ、一般の賃貸マンションの一部を借り受けたもの4棟があります。これらを臨床宗教師の「実践トレーニングの場」として提供することができます。そして、近隣の老人ホームと提携した臨床宗教師のモデル実績もあります。これらの施設と実績を会員（個人）がシェアできるような調整を本部と事務局で行います。

6. ホームページ

この法人の情報発信と会員募集は、ホームページで行なっています。また、お問い合わせ用のメールアドレスも記しておきます。多くの皆さまがご賛同くださることを願っております。

合掌

<一般社団法人臨床宗教師・ビハーラ協会>

ホームページ：<http://www.cva.jp>

E-mail：office@cva.jp



学会・研究会参加報告

ICGB 2014

2014年6月11日～14日にかけて香港大学で開催された死別とグリーフケアに関する国際学会、ICGB2014(The 10th International Conference on Grief and Bereavement in Contemporary Society)に、谷山准教授、高橋准教授、森田敬史さんの三名で参加し、下記のポスター発表を行ないました。

- ・森田敬史+谷山洋三「グリーフケアのツールとしての布地蔵」(“Nuno-jizo” as a Tool for Grief Care : Case Studies of the Survivors of the Great East Japan Earthquake.)
- ・谷山洋三+高橋原+鈴木岩弓「東日本大震災後に始まった新しい臨床宗教師養成プログラム」(New Education Program for Rinsho-shukyo-shi (Japanese-style Interfaith Chaplain) Started After the Great East Japan Earthquake.)
- ・高橋原「心霊現象に対する仏教僧侶の対応」(How Buddhist Monks Deal with So-called Occult Phenomena in Disaster Areas after 3.11: From the View Point of Grief Care.)



右：イギリスからの参加者の質問を受ける谷山准教授

香港での開催ということで、中国と欧米からの参加者が多いという印象でしたが、多くのセッションの中で、緩和ケア、PTSD、自死、死生学等々といった今日の日本でも論じられることの多くなったテーマが扱われていました。

注目を集めていたトピックとして、「死を語るカフェ(Death Cafe)」の運動というのがあります。これは2010年にロンドンから始まったもので、タブー視せずに死と向かい合うことで生き方を見つめ直すということがその主旨となっています。自発的に街のカフェに集まった人々が、特定の結論や価値観を押し付けないというルールで、コーヒーとケーキを楽しみながら自由に死を語り合います。

どこかカフェ・デ・モンクを思わせる企画ですが、言うまでもなく大きな違いがあり、そこに僧侶の姿はありません。オープンに死について語り合った人々がまた別れ別れになっていきますが、そこで得たものをどのように深めていくのかは一人一人に任されているようです。この問題について大昔から知恵を蓄積してきた宗教に目を向けてみ

る、という方向には向かわないようです。これはこの学会全体の雰囲気でもあり、ケアに関わる専門職が多数参加していましたが、宗教者の影は薄く、宗教(者)との連携という発想はほとんど見られないという印象でした。



Death Cafeのホームページより (<http://deathcafe.com/>)

学会の見学ツアーでは、キリスト教系の老人介護施設を訪問する機会に恵まれましたが、ここでは組織図の中に「院牧部」というのが設けられ、専従の牧師やチャプレン研修生が働いていました。一人一人の体格や症状に応じてカスタマイズされた車椅子など行き届いた対応について説明を受けましたが、一方で、手持無沙汰な様子で虚空を見つめている入居者の姿を見るにつけ、こういう方々の思ひ出話などに耳を傾けに訪ねてくる人がいればさぞかし喜ばれるだろうという印象も強く持ち、改めて傾聴ボランティアの意義について考えさせられました。もちろん、これはわざわざ外国に行かなくても存在する現実です。

第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会

2014年7月12日～13日、神戸ポートピアホテルで行なわれた第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会において、鈴木岩弓教授による講演、谷山洋三准教授と臨床宗教師研修修了者によるシンポジウムが行なわれました。

鈴木岩弓「臨床宗教師の社会実装——震災被災地から超高齢多死社会へ」(7月12日)

シンポジウム「臨床宗教師の可能性」(7月13日)

谷山洋三「臨床宗教師は何を目指すのか」

高橋悦堂「東日本大震災被災地での臨床宗教活動」

金田伊代「京都に転居した震災被災者に対する臨床宗教師の働き」

佐々木慈暉「緩和ケア病棟における臨床宗教師の役割」

高橋悦堂「在宅ケアにおける臨床宗教師の活動」

遠山玄秀「医療との連携を目指す臨床宗教師の活動」

山口龍彦〔総合司会〕(高知厚生病院 緩和ケア科)

谷山准教授が、東北大学実践宗教学寄附講座による臨床宗教師の理念と研修の実績について報告したのに続いて、臨床宗教師研修の修了者の方々がそれぞれの活動について報告しました。



高橋悦堂さん（第1期修了生）は東日本大震災被災地での「移動傾聴喫茶カフェ・デ・モンク」の活動と宗教者への期待の存在について紹介した上で、東京や大阪など大都市圏でも宗教者が同じ役割を果たし得るのかと問いかけました。また、岡部医院の在宅緩和ケアへのボランティアとしての関わりから臨床宗教師の可能性と課題について考察しました。

金田伊代さん（第4期修了生）は東日本大震災の影響による避難者が京都府にも約930名存在し、不安を抱えながらの生活を強いられている状況を報告し、神社のお祭りなどを通して日常と離れた空間で心の休まる時間を持つていただくという形での支援の可能性を論じました。

佐々木慈隆さん（第2期修了生）は、宗教を背景に持たない病院で求められているのは思いを吐露できる「赤の他人」であり、必ずしも「宗教者」ではないというという認識を踏まえて、スタッフとの信頼を築きながらケアの対象となる相手を「待つ」という心がけについて述べました。

遠山玄秀さん（第3期修了生）は、僧侶として葬式や法事を通じて、グリーフケアを行ってきた経験から限界を感じ、いのちを支える多職種によるチームを作ることを考えるに至った経緯と現在の勉強会や医療との連携の取り組みについて説明しました。

この研究会は研究者だけでなく、ケアの現場に立つ人々が多数参加することが特徴であり、多くの方々に臨床宗教師の試みについて知っていただくことができました。

日本スピリチュアルケア学会第7回学術大会

プレパネル「臨床宗教教育の可能性」

2014年9月6日、上智大学において開催された日本スピリチュアルケア学会2014年度第7回学術大会において、プレパネル「臨床宗教教育の可能性」が行なわれました。

この企画は、日本スピリチュアルケア学会が認定する「スピリチュアルケア師」を養成する教育プログラムを持つ三つの大学の教育担当者が、それぞれのプログラムの特色を踏まえて、今後の日本におけるスピリチュアルケア専門職養成のあり方について議論しあうというものでした。

登壇者

井上ウィマラ（高野山大学別科スピリチュアルケアコース）
谷山洋三（東北大学実践宗教学寄附講座）
伊藤高章（上智大学グリーフケア研究所）

高野山大学のプログラムは仏教精神あるいはマインドフルネスに基づくもので、平日毎日（または土曜日）、授業が行われる二年間のコースです。入学資格は高卒以上となっています。

上智大学のプログラムは、大卒以上の社会人向けのコースで、毎週水曜日に隔週土曜日に授業が行われる二年間のコースです。大学はカトリックですが、特に宗教色のないものとなっています。

これに対して、東北大学の臨床宗教師研修の特徴は、宗教性を重視するが超宗教超宗派の立場に立ち、宗教者を対象として短期間に実施するという点にあります。

こうした多様な教育訓練を受けた人々が、日本スピリチュアルケア学会によって「スピリチュアルケア師」として認定を受けるわけです。現在は暫定資格ですが、資格審査制度が発足するという2019年度までに、ある程度の調整や統一が必要となると考えられます。

そもそも「スピリチュアリティ」とはどう定義されるのか、「スピリチュアルケア師」とは何を修得した人材なのか、「臨床宗教師」との関係はどのように考えればよいのかなど、さまざまな視点から、「臨床宗教教育」の可能性について議論が交わされました。



臨床宗教師研修が認定プログラムとして承認

この学術大会において、東北大学実践宗教学寄附講座の臨床宗教師研修が、日本スピリチュアルケア学会の認定プログラムとして承認を受け、日野原重明同学会理事長より、講座主任鈴木岩弓教授に認定証が授与されました。



また同時に、当講座主催の臨床宗教師研修において指導に当たっておられる伊藤文雄先生、金田諦応先生、高橋悦堂先生に、日本スピリチュアルケア学会スピリチュアルケア師の指導資格が認定されました。

第5回臨床宗教師研修報告

研修データ

期間：2014/5/20-22, 6/24-25, 7/29-30

場所：石巻市曹洞宗法山寺、仙台市浄土宗蓮光寺、東北大学、他

修了者：19名(うち女性4名)

宗派内訳：真宗大谷派(4)、浄土真宗本願寺派(3)、曹洞宗(3)、日蓮宗、高野山真言宗、真言宗智山派、法華宗陣門流、正法事門法華宗、日本ナザレン教団、日本バプテスト連盟、天理教、立正佼成会

地域：北海道、宮城、富山、石川、新潟、埼玉、東京、岐阜、滋賀、大阪、福岡、佐賀、熊本

年齢：24才～71才(平均45才)

第5回臨床宗教師研修は前回と同様、二泊三日1回、一泊二日2回の合宿(全体会)と、その合間の各地での分散実習という形式で行なわれた。修了者は19名で、これによって2012年から現在までの修了者数は累計で76名となった。

医療・福祉施設での傾聴実習の受け入れ先として新しく加わったのは次の各施設である。

(1)ささえ愛よろずケアタウン：医療法人社団ささえ愛よろずが運営する内科・心療内科・精神科クリニックを中心に、高齢者住宅、デイサービス、訪問介護、在宅終末期ケアを行う。新潟市秋葉区。

(2)松阪市民病院緩和ケア病棟：松阪市が運営する市民病院内にある院内独立型の緩和ケア病棟。三重県松阪市。

これら以外の実習先は前回と同じく、岡部医院、Café de Monk(カフェ・デ・モンク)、仙台食品放射能計測所、電話相談、沼口医院、光ヶ丘スペルマン病院ホスピス、佼成病院ビハール病棟、ビハール21関連施設群、長岡西病院ビハール病棟であった。

今回の研修において特筆すべきことは、本年四月から東北大学に続いて臨床宗教師研修を開始した龍谷大学実践真宗学研究科との合同開催の形でスタートしたことである。五月の全体会のみであったが、同研究科の大学院生11名(いずれも浄土真宗本願寺派)を受け入れての研修となった。受講者及びスタッフ等を含めて40名を超える大所帯となり、会場をお借りした曹洞宗法山寺様には多大なご負担をおかけした。ここに改めて感謝を申し上げる。

5月20日の研修初日、法山寺の北村暁秀師の先達で、津波で多数の方々が亡くなった同市内湊地区を回る追悼巡礼を行った。今回は恵愛病院跡地前、湊二小体育館跡地前を経て、旧北上川沿いの石ノ森萬画館のある中瀬を対岸に臨む地点まで歩かせていただいた。途中、飲食店の従業員の方々が出て来られて巡礼の一行を合掌にて見送ってくださったのが印象的



であった。



研修二日目は石巻市内の仮設住宅で開催されたカフェ・デ・モンクでの傾聴実習が行なわれた。上述の通り大人数であったため二箇所に分散して行なわれたが、ともに多くの来場者を得て賑わった。

研修三日目にはロールプレイのグループワークが中心に行なわれ、ここで龍谷大の皆さんとの合同開催によるプログラムは終了となった。



東北大と龍谷大の研修参加者一同(法山寺本堂前にて)

第二回の全体会は、各地に分散しての実習を経て、六月に仙台市の浄土宗蓮光寺で行なわれた。今回はみやぎこころのケアセンターの片柳光昭先生(精神保健福祉士)を講師にお招きした。被災者支援の現場におけるアルコール依存や自死の問題、疲弊する保健師の業務の実情など、興味深い内容をうかがうことができた。二日目には追悼巡礼として、名取市のあんどん松付近(表紙写真)、東禅寺、日和山を回った。



片柳光昭先生



グループワーク(会話記録)

「会話記録」について

6月の全体会から、「会話記録」のグループワークが始まった。しばしば誤解があるので説明を付け加えると、これは各地での実習期間中にケア対象者との間に交わした会話に基づくロールプレイである。印象に残ったやりとりを各自の記憶によってA4二枚程度の台本形式にまとめたものを用いる。グループの中で、臨床宗教師、ケア対象者、ト書きを読む人の役を割り振り、会話の再現を行なう。言葉の選び方などのテクニカルな問題に関する事例検討が行なわれるのではなく、それぞれのケースに即して、それぞれの立場の人がどのような気持ちになったかという感情にフォーカスが当てられる。各施設での実習を、単なる見学や現場体験に終わらせることなく、しっかりと会話記録を作成し、グループによるセッションを行なってスーパーバイズを受けるというサイクルは、臨床宗教師研修全体の中でも極めて重要なものとして位置づけられている。



グループワーク（会話記録）

7月、再び各地での実習を経て、すっかり暑くなった仙台に再び集まり、仙台北教会、浄土宗蓮光寺を会場に最後の全体会が始まった。教会では賛美歌「歩ませてください」が歌われた。メロディが馴染みにくく感じられたが、後になって耳を離れなくなるのは不思議なものである。食品放射能測定所いのも見学し、夜に行なわれた渡邊祥文氏（福島市曹洞宗長秀院）の講義と合わせて、原発事故による被災者のケアの必要性についても学ぶところが多かった。



7月30日、研修最終日は東北大学片平キャンパスに会場を移し、講義、グループワークに続いて、修了式が行なわれた。鈴木岩弓教授（実践宗教学寄附講座主任）より、今後の日本社会において臨床宗教師にはますます大きな役割を果たして欲しいという期待と激励の言葉とともに、一人一人に修了証書が手渡された。下に示す表は、修了証書の裏面に記された履修内容である。

（なお、臨床宗教師研修風景の写真は当講座のホームページで多数公開しておりますのでご覧下さい。）

表：第5回臨床宗教師研修講義科目一覧

担当講師	授業題目	種別	時数
伊藤文雄	「臨床宗教師の理念」	講義	30分
小西達也	「臨床宗教師の倫理」	講義	60分
谷山洋三	「スピリチュアルケア」	講義	60分
谷山洋三	「グリーフケア」	講義	90分
金田諦應	「カフェデモンク」	講義	60分
川上直哉	「放射能の影響」	講義	60分
谷山洋三	「会話記録の作成法」	講義	30分
相ノ谷 修通	「公共性の確保」	講義	60分
河原正典	「在宅緩和ケア」	講義	90分
三浦紀夫	「臨床宗教師の社会実装」	講義	30分
鈴木岩弓	「民間信仰論」	講義	90分
谷山洋三	「宗教的ケア」	講義	60分
吉田裕昭・高橋悦堂	「地域と文化」	講義	60分
渡邊祥文	「人権擁護」	講義	60分
木村敏明	「宗教間対話」	講義	60分
高橋 原	「実践宗教学」	講義	60分
片柳光昭	「精神保健と医療」	講義	90分
森田敬史・打本 弘祐	「死の経験」	グループワーク	50分
谷山洋三・森田敬史・打本 弘祐・高橋悦堂	「実習振り返り」	グループワーク	50分×5
〃	「ロールプレイ」	グループワーク	90分×2
〃	「会話記録」	グループワーク	90分×4
〃	「研修振り返り」	グループワーク	50分×4
谷山洋三・森田敬史・打本 弘祐・高橋悦堂	「実習先説明」	講義	120分
実習科目	傾聴実習(カフェデモンク)	実習	240分
	追悼巡礼	実習	150分+90分
	日常儀礼	実習	15分×12
	傾聴実習(各地)	実習	480分×3



2014年7月30日、研修修了式を終えて

研修受講者の声 (第5回臨床宗教師研修)

第5回臨床宗教師研修の最終日「研修振り返り」において「この研修で得たこと」を、研修受講生の方々に話をいただきました。

田中靖隆（法華宗陣門流）

三か月前初めて東北を訪れまして、研修に臨み、今日の日を迎えられたことは、なかなか自分に自信もなく、到底想像もできなかったんですけれども、本当にここにおられる皆様のおかげで今日を迎えられました。本当にありがとうございました。先生が最初に言ったように、この研修の成果すべてが新しい私の気づきと成果につながるだろうと思っておりますが、これから再スタートして新たな自分を見つめ直しながら頑張っていかなければならないんだと思います。皆さんが口をそろえて言うように宗教、宗派を超えた連携の気づき、仲間意識、これは三か月前にはとても無かった新しい自分の感覚でございます。それと宗教的ケアとスピリチュアルケアの違いをわきまえて、これからすべての人にどういふふうにして接していけばいいのか考えながら頑張っていきたいと思っております。これから自分の中での一つの課題として、傾聴させていただいたことをなるべく会話記録等に収めさせていただきまして、それを踏まえてさらに新しくどんどん気づき、反省しながら進んでいければありがたいことだと思います。



樋口泰巧（正法事門法華宗）

皆様お世話になりました。私は今年で出家23年になりますが、今まで癖づいた垢をこの研修できれいに洗い流していただき、宗教者としての原点に還らせていただいた気持ちでいます。反省すべき点は多々ありましたけれども、これも忘れずに持ち帰って日々の法務に生かしていこうと考えております。

この研修で得た事は沢山の宗教・宗派の方々と胸襟を開いて本音でお話をする事です。その会話の中で「みんなは法務の中でこういう事で悩んでおられるのか」とか「こんな経験は自分にもあるな」と色んな意味で学びがあったり、悟りがあったり、反省があったりと非常に貴重な体験をさせていただきました。

それからこれだけまじめで志を持った宗教者の方々が全国におられるということを知ることができた喜びを感じています。志を持ってそれぞれのフィールドで活動を行っていくことができれば、少しずつでも未来が明るい世の中になっていくんじゃないかなという可能性を感じました。ありがとうございました。



阿部頌榮（日本ナザレン教団）

お世話になりました。個人的に一番

勉強になったことは、スピリチュアリティ、霊性といったことをどうとらえるかということです。それは多分大きく言えば世界観ですね、その人が世界をどうとらえているのかということ。を単なるインフォメーションとしてとらえるのではなく、その奥にある感情の世界、それが表象としてスピリチュアリティになる、それをすごく考えさせられました。その中で今まで持っていたとらえかたがガラッと変わるような感じを受けました。それはとても大きなことだと思います。それともう一つ大事なことは、宗教者が他業種の方と関わるという中で、やっぱり知らなくてはいけないこと、常識とかたくさんあるわけで、その全体像の中で学んだ知識がどこに位置するものなのか、全体を見せていただいたような気がします。もう一つは、みなさん本当にそうだと思うんですけれども、とくに印象に残ったのは田中至道さんと野々目さんのお話で、お二人ともそれぞれの現場ですごく地道に、誠実に実直に関わって信頼をもとに地道に活動されているんですよね。そういうふうに小さな、地道な何かというものを積み重ねていくのが必要なことだなと本当に思っ、勉強させていただいた感じです。



古川達雄（真宗大谷派）

生きている人を大事にしたいとつくづく思いました。お寺から見ると、お亡くなりになってからの付き合いなんですけれども、逆に生きている時からの付き合いをもっともっと、考え方を改めて重視していきたいなと思います。そんなふうに思いました。以上です。



橘 勇人 (真宗大谷派)

私はこの三か月間で、全宗派、全宗教、共通のものは何なのかという問題意識を常に持って本研修に臨んでいました。今の私の中では、「感謝する」ということが一つの答えと思いつつ、ではそこから臨床宗教師としてボランティアとして福祉施設や檀家さんと接する際にどうアプローチできるか、今後問題意識をもって進んでいきたいと思っています。また、この度は、先生であり同じ真宗大谷派の先輩僧侶である谷山先生の考え方に触れ、そして、他宗の儀礼をこなす姿を通し、自分の宗教観に変化も生まれました。医療・福祉の現場で、自らの宗派にとらわれず、人に寄り添い、傾聴することの深さを学べたように感じております。今後は、臨床宗教師としてどんどんアウェイに飛び込んでいき、幅広く活躍できればと思っています。



高橋秀典 (立正佼成会)

立正佼成会の高橋でございます。今までも自教団の信者の心の救済に関して、積極的に取り組んできたわけですが、今回、臨床宗教師研修に参加させて頂いて、公共の場で社会に貢献していく部分の意識づけを強く頂戴しました。今後は、東北大学の講座修

了という看板を掲げることができますので、一個人として公共の場で学びを深め、今までに無いチャンネルをチャレンジしてみたいと思っています。具体的には、本会付属の佼成病院にビハラー病棟がありますので、そこで何ができるのか、今後考えていきたいと思っています。



高橋一晃 (真言宗智山派)

臨床宗教師活動、宗教的ケア、あるいはスピリチュアルケアの場面におきまして一番印象に残ったのは、必ずしも宗教的な言葉であったり、宗教的な作業であったり、ということをやらなくてはいけない、ということではなく、あくまで対象者のニーズをきちんとじっくり聞いて、その上で判断すべしという先生方の話、臨床宗教師という名前がついているからといって必ずしもすべての対象に宗教をふりかざして何かをしなくてはならないということではないのだということが一番印象に残りました。もう一つは、似ていますが、自分のものさしで何事も測ってはいけないと、相手が何か言うそれは相手の言っていることが事実なわけですから、それをしっかり受け止めて、そこから思考をスタートさせなくてはならないということも改めて認識しました。これらをしっかりふまえて今後は活動してゆきたいと思います。



田中至道 (浄土真宗本願寺派)

本当にお世話になりました。今回の研修に参加させていただいて、まず第一回目の全体会から申しているんですけども、本当に宗教的儀礼のすばらしさというのを感じましたし、また自分の宗派内の儀礼のよさもまた同時に感じました。そして人生で初めて行脚という体験をしまして、被災者の方々からの眼差しや、手をあわせる姿を目にしたときに、本当に宗教者が求められている可能性というものを強く感じまして、その姿を目にしたときに臨床宗教師として自覚してやっていかないといけないんだという思いを同時に持ちました。そして宗教的ケアとスピリチュアルケアがわかった、とまではまだ言えませんが、これを一つの土台として自分の現場、もしくは寺院活動内で檀家さんの声とかを敏感にアンテナをはって人々の老病死や苦悩する思いに耳を傾けていきたいなと思いました。今後いろんな現場でまた皆さんとお会いできることを楽しみにしております。



金田諱晃 (曹洞宗)

本当にお世話になりました。私としては宗教者として、もしくは僧侶とし

てどのようなあり方で今後生きてゆくかというのが大きなテーマとしてありました。生老病死に寄り添うといったときに、そういった思いはあったのですが、実際の現場に行って亡くなりそうな方と向き合ったという経験が自分の問題を現実的、具体的なものに育て、これからそういった問題を実際に解決し、答えを見つけるための道が始まったのかなと感じました。それから今回の研修では原発の問題が深く取り上げられたと思うんですが、その中で一つ、研修全体をとおして自分のまとめにもなるような、印象にのこるような言葉がありました。それは、「知らず知らずのうちに社会のしくみの中にとりこまれてしまっている自分。差別も知らず知らずのうちにしてしまう」という、意識していれば、知っていればしないような差別も自分の知らないうちにしてしまう、福島の方だったり、原発関係の方だったり…いやな気持ちをさせてしまう、そういったことに一つ一つ気づいてゆくということも宗教者として大事なことなんじゃないかなと。さまざまな望みがあってもまとめきれないのですが、私も今後現場で学びを深めていけばいいかなと思いますので、よろしくお願いいたします。



出島元寿（日蓮宗）

皆様、ありがとうございました。私本来人見知りで、あまりしゃべらないというので有名なんですけれどもね…まあ冗談ですけども(笑)。研修に入る時、いろんな宗教、宗派の方がいらっしゃるということだったんですけども、本当にちゃんとしゃべれるかなあというところが正直不安だったところですが、こうやって19名の同じ第5

回研修を受けた臨床宗教師を目指す皆様とお会いしてお話できました。むしろこれからだと思いますけれども、教えていただくこともあり、私なんかが教えることなんかないでしょうけれども、こうやって皆様とお話が今後できるという環境に來られたことが何と言っても一番の収穫なんじゃないかなと思っております。



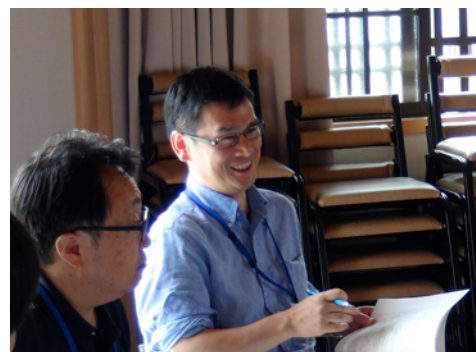
天野宏心（曹洞宗）

今回大変貴重な、ありがたい機会をいただいたなと思いましたが、やっぱり、いろんな宗派、宗教の方々が、大変ありがたい縁を頂きまして心を一つに交流して、一つのものを目指しているというのは、日本広し、世界広しといえどもなかなかない、本当に貴重なことなのではないかなと思っております。そしてやはり、困っている方に寄り添って一緒に居たい、助けたいとかという気持ちがあるというのが、皆同じ、共通しているものなのだということがすごく感じました。そして我々、臨床宗教師研修を受講させていただいた者は、やはり臨床ですので、臨床の宗教師ですので、やはりこれから現場にずっと関わって行くという覚悟を持たなくては行けないと、私自身そう思いました。この場は本当に修行の場だったと私は思っております。今日からまた新しいスタートに立った気持ちでございます。これからますます勉強して精進したいと思います。



松隈英明（浄土真宗本願寺派）

この研修に参加するにあたって、そもそも臨床宗教師とは何ぞやという疑問がありました。これは少し、いや、相当分かったんですが、もう一つ、私がこの研修に参加する動機でもあった、終末期の人々になにか役に立つ人間になりたいと思っておりまして、そのような方々との接し方が少しは分かった気がします。この経験を今後活動につなげてゆきたいと思っております。ありがとうございます。そして最後に、これ以上のものはないかと思えます。他宗教、他宗派の志を同じくする皆さんとの出会い、これが何よりの収穫だと思っております。この出会いに感謝いたします。



上田禮子（天理教）

三か月間、今まで経験したことのない場を与えていただきまして、たいへん光栄です。臨床宗教師という立場、そうしたものを創発して下さった諸先生方のアイディアに希望を持ちました。もう一つは、私は、まわりが「無宗教」の人という中にドンといわれたときにすごい不安を感じます。信心をしていない人々、それが普通で大多数ですが、神仏を信じていない人々に

中にいることは、見知らぬ森の中に紛れ込んだような不安を感じるのです。勿論、一番ほっとするのが同じ信仰をしている仲間、同族の中でした。今回もっとほっとするところがあったっていうことに、非常に驚きを覚えます。それはこうした宗派を超えた中に身を置き、そこに居るってことが、私は今まで味わったことのないほっとした気分を感じたんですね。それぞれの宗派の集合的エネルギーで自己の内面が高揚され、浄化されたような気がいたしました。また、自分の陥りやすい盲点とか、宗教家としての責任とかを改めて確認させていただきました。



渡辺信一（日本バプテスト連盟）

この三か月にわたり皆様の温かいご支援と交わり、本当にありがとうございました。私は福岡に帰ってまず第一にしなければならぬのは教会に対しての報告会です。それとともに、私の近所に某クリニックの医療分室に勤めている私の同僚の牧師が、私が臨床宗教師の研修を受けるということを院長先生に話して下さっております。その院長先生にお会いして、臨床宗教師のいわば開拓営業という形で、どういふふうにしてつないでゆくかということをしつかりと伝えていきたいと考えております。やはり言葉本来の意味で私の実習の指導教師であった三浦先生の言葉通りに「お前ぐらい一人は臨床宗教師になってくれ」という言葉を、バプテストの牧師の身分、職分の中で少なくとも実践してゆきたいということを考えています。一番やられたことは、とくに我が国の葬祭事情において三浦先生から事細かく指導を受けまして、私が17年キャリアを持ってきた自

負というのがゼロになるということがありました。いかに自分がお寺さんのことや、家族事情、社会事情、女性がどう生きるのか、嫁としてどう生きるのか、といったことを、何にも知らずに今まで17年間説教をしてきたか。そこはいろいろ学びつつ、皆さんに知恵を借りつつ歩んでゆきたい、実際にやってゆきたいと思っております。



佐々木瑞恵（浄土真宗本願寺派）

先生方と実習生の皆さまの熱い思いのなかで無事に研修を終われましたことをありがたく感謝しています。一番重く感じたのはやはり被災地の方、苦しんでいる人を深く知る事が大事だなとおもいました。ちょっと他人事だと思って見ていた自分に気づき、これではいけないなあという思いを随分感じました。それともう一つ大事な事は、ずっとスピリチュアルケアということで宗教的なことを少し端において勉強してきたので、宗教的に関わるということがどういうものなのかよくつかめなかったのですが、やはりこのスピリチュアルケアと宗教的ケアと両輪でもっともっと深く勉強しなくてはならないし、自分自身信仰を深めるということも大事だなというふうに気が付きました。自然に宗教的なケアにすつと入っていける自分がいないということも実習の中で裏付けられたと思います。たくさんの気づきをいただけたことが大きな成果だなと思っております。緩和ケア、終末期ケアにももう少し深く関わっていくには、もっと勉強しなきゃいけないなということに気づかせていただきました。最高齢で最初のときから「ついていけるかしら」と心配していたんです。皆さんのおかげで無事にここまでこられました。ありがとうございました。



吉田俊英（曹洞宗）

私なんか本当に一番時間的にも費用的にも楽な参加をさせていただきまして、遠来の皆様には恐縮です。昔山岳信仰を研究していて、要は曹洞宗の檀家と言っても、実際にはいろんな信仰を持った人が居て、いろんな信仰を使い分けて生きているんだという発表をしたことがありました。でも自分が檀家さんにそういうことを踏まえて対応していたかという、していませんでした。結局檀家さんに対して自分の言いたいことだけを一方的に語っていただけではないだろうか。「ただお経を読んで御布施を貰うだけのつまらん坊さんになってしまっていたんだなあ。」という反省と気づきをさせていただいたように思います。今後の自分の展開としては、刑務所での教誨をチャプレンと言うに値するものにしたいと思っています。刑務所で教誨師を15年程やっています。小西達也先生の講義でチャプレンの例として「教誨師」を挙げておられましたが、講義を聞きながら「私自身チャプレンと言うに値するだけの教誨をしているのだろうか？」と自問自答しておりました。私が担当している刑務所では、「個人教誨」は30分という時間でやると決まって、実際面談できるのは正味10分か15分程度です。その中で、「チャプレン」と自負出来る教誨となるよう、自分なりに工夫していきたいと思っています。



篠 由希子（真宗大谷派）

三か月間本当にありがとうございました。私がこの研修に参加させていただいて一番大きく得たものとしては、法務をしているにもかかわらず、皆様のように、信じるものがまたきちんと持っていない自分がいるということを改めて確認させていただきました。その思いに気づいたのは、私が勝手に宗教者というものにある意味不信感を持ったまま、こっちの世界というか、この仕事を始めてしまったので、それがなんとなくまだ心の中にあるままでいるなものを見ていたなと思ったんですね。ここにきてそれぞれのいろんな信念や思いを持っていらっしゃる方の話を聞いたときに、ああ、もしかしたら信じられるものだったんじゃないのかなという、また違った視点が心の中に生まれてきたことは、自分にとってはすごくありがたいことでした。

もしここに来ないで、不信感を持ったままそれを隠して自分のお寺にいたとすると、それは自分自身にとっても、また自分が会う方にとっても失礼なままの時間をすごすことになったのではないかと思います。ここで学ばせてもらったことは一つ私の転機になったと思います。それともう一つは、実習や振り返りや、いろいろな講義を聴くなかで、やっぱり自分のこととして受け取れない自分なんだと確認させてもらったことです。この気持ちも、日常のいろんなことに追われていくうちになくなってしまうと思うんですけども、それでも、きちんと人として話をした中で感じるという経験ができたので、それは記憶として、思い出として、改めて思い返し、それではいけないという思いとともに、きちんと活動していきたいなと思います。



野々目月泉（真宗大谷派）

三か月なんとか無事に終わらせていただきました。皆様方に混じって学ばせて頂くことは、とても楽しく嬉しく、周りの人に助けていただき、皆様・仏様が通わせて下さったと思っています。自分が前に立っての仕事をしていませんので、毎日限られた人相手の、狭い世間での暮らしです。何年分の方と出会わせていただいたようで、ものすごく新鮮でした。先生方の貴重なお言葉はもとより、自分自身への思わぬ発見や気づきなどもたくさんあって、書き残して置かずに忘れてしまったらもったいないことばかりでした。不思議な御縁や出会いもたくさんあり、そういうものも踏まえて、これは来させていだいたんだなあとしみじみ感じています。それと何度も言っていますが、一つは3.11、もう一つは7年前の夏、8月4日に亡くなった私の父ですね。長い間ずっと引きずって来ました。それがこの研修を受けることで自分自身が癒されました。おかげさまで今回同行しました娘と、明日三陸に行きます。力を得て、ようやく、なにも無くなった陸全高田を訪ねて祖母や親戚のお墓参りをし、親戚・知人に会ってこれます。地元で頑張っておられる山浦玄嗣先生というキリスト教のお医者さんにも初めてお会いできます。そこから初めて震災後の私の新しい一歩が始まるかなと思います。覚悟として、私は臨床宗教師を野々目整子ではなく野々目月泉で行きたい。法名を背負って、守っていただき後ろ押ししていただいて活動したい、それは覚悟にも似た強い思いです。これからもどうぞよろしくお願い致します。



新田忍澄（高野山真言宗）

あらためて宗教家の重要な部分を考えさせられたし、また、臨床宗教師の役割というものも、まだまだ、もっともっと深いものがあるんじゃないかな

というのを学ばせていただいたと思っています。また全宗派を超えて、今までそばにいたことのないような方と、またそれ以上に宗派を超えたつながりというものを持たせていただいたことが、これから重要なことになってくるのではないかなと思っています。現場において、本当に、死を宣告された人の生きていく力の凄まじさ、その力強さがひしひしと伝わってくる。またそれはそれで素晴らしいものがあるんだと感じさせていただきました。最後になりますけれども、来年、高野山の方でカフェ・デ・モンクを開催させていただくことに内定しました。またご案内させていただきますので、ご一緒させていただきたいと思っています。



研修受講者インタビュー

今回の第5回研修で印象深かったエピソードを二つご紹介します。一つは、橘勇人さん（新潟県、真宗大谷派）が、六月の全体会に突然坊主頭で現われたことでした。真宗のお坊さんは非僧非俗の生活を送り、有髪のスタイルが一般的であると思われますが、どのような心境の変化があったのでしょうか。もう一つ、樋口泰巧さん（佐賀県、正法事門法華宗）が、一人暮らしの檀家さんを調べてお寺でおもてなしをするという試みをされたと聞きました。どのような発見があったのでしょうか。お二人に話をうかがいました。

橘勇人さんインタビュー

――頭を丸められたのはどうしてですか？

橘：はい、実習現場に入る際に、「僧侶」として認識してもらいやすいと考え、坊主頭にしました。

――子供の頃など振り返って、坊主頭にしていた時期はあったんですか？

橘：いえ、坊主頭は12年前に得度をした時以来で、2回目です。

――お父様、ご祖父様も僧侶であると思いますが、頭を丸めていらっしゃいましたか？

橘：いえ、浄土真宗なので、得度以外は髪を普通に伸ばしています。

――真宗僧侶としてあえて頭を丸めるべきではないという葛藤のようなものはありませんでしたか？

橘：特に葛藤等はありませんでした。浄土真宗の方でも剃髪している方もいれば、芸術家のように伸ばして縛っている方もいるので、そこは自由でいいのではと思っていました。むしろ、他宗のように坊主頭でカフェ・デ・モンクに行くことによって「僧侶」として認識してもらえることが凄いことだと感じておりました。

――今回は、床屋さんに行かれたのですか？

橘：俗にいう1000円カットといわれるお店に初めて行きました。ちなみに、担当していただいた店員さんからは、雰囲気が変わるとか、何が起きたのかなど、やいのやいの言われ、5回ほど慰留されましたが、無事3ミリに丸めることができました。

――ご家族、檀家さんのリアクションはどのようなものでしたか？

橘：家族には不評です。檀家さんの反応も五分五分といった感じです。肯定的な意見として、頭の形が良いから似合うとか、僧侶らしいと言ってくださる方がいる反面、色気がなくなったというご意見も意外と多く、少し凹みました。

――職場では何か言われませんでしたか？二足のわらじの生活についてのご苦労なども合わせて教えてください。



橘：新潟市役所に勤務しながら兼職で僧侶をしています。臨床宗教師の研修については、東北大学の講座ということもあり、上司をはじめ同僚も大学に勉強に行くという認識でした。また、頭を丸めたことについても、特に何か咎められることもありませんでした。実は他の職員でスキンヘッドにしている人やスポーツ刈りにしている人も数名いるので、髪を短くする分には問題はないです。どちらかというと髪の毛をロン毛にしている人や髭を生やしている人は、市民から苦情を受ける原因となるようです。兼業については大変なところも多いですが、それを理由に様々なことから逃げないようにしています。

徳富蘇峰が「忙しいとは、怠け者の遁辞である」と言ったように、忙しい忙しいと言い訳せずに、何事も楽しんでやればきっと楽しくなるのではないかなと思っています。むしろ、役所ではお目にかかれない様々な方々と出会えることは、人としてのかけがえのない財産だと思っていますし、僧侶としての活動、そして寺業が様々な方に喜んでもらえること、いわば皆喜力が自分の原動力になっています。なので、大変ということを感じるより、まだまだ何も目的を達成していない、これから成長する、できるということしか思っています。ただ、僧侶の関係で役所からお休みをいただく時は、周りの職員に申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

――実習の現場では、坊主頭にした効果のようなものをどのように感じられましたか？

橘：坊主頭は正解でした。現場のスタッフが患者・入所者の方に対し、坊主頭と作務衣姿を通して、私を「この頭と格好でどなたかわかりますよね？」といった形で紹介していただき、すぐに僧侶として認識していただくことができました。

――ご自分の経験について、現在、未来の臨床宗教師の人達に伝えるとしたらどんなことがありますか？

橘：頭を丸めることは重要なことではないと思いますが、現場に行った時に、患者・入所者さんへの最初の入り方、アプローチの仕方が非常に楽になったことは事実です。また、僧侶がNGな人もファーストコンタクトで読み取ることができました。格好から入ることはあまり好きではないですが、医



師や看護師の白衣効果のように、僧侶の御衣や坊主頭によって「安心」を与えることができるのではないのでしょうか。そして臨床宗教師は超宗派ゆえに自坊の宗派を縦糸とし、他宗を横糸として見つめ、良いところをどんどん受け入れ活かしていくことが大切ではないかと感じております。

樋口泰巧さんインタビュー

――一人暮らしの檀家さんを調べてみようと思ったのはなぜですか？

樋口：第5回臨床宗教師研修第一回合同会で三浦紀夫先生の「臨床宗教師の社会実装」の講義をお聞きし、そのお話の中で今まで自坊で行っていなかった活動が食事会でした。良い事は是非持ち帰って実行しようと思っていましたので、帰山してすぐ一人暮らしの世帯を調べました。

――どのような方法で調べたのですか？

樋口：私の寺院は俗に言う限界集落にあり、後継者が少ない地区にあります。また前住職が尼僧ということもあり、檀家数もさほど多くありません。いつも緊急時（入院等）に連絡が取りやすいように古くから地区別の電話連絡網がありますので、一世帯ずつ家族関係を思い起こしながらチェックして電話をお掛けしました。

――檀家さんの規模や普段の接し方について教えてください。

樋口：檀家全体でも150世帯くらいです。地域の風習で年に2度はほぼ全部の世帯、お盆の供養と年末の煤払いに回ります。あとは希望される世帯に月回向に伺う事もあります。檀家のご家族は3世代は面識があり、お付き合いは深い方だと思っています。



師匠の教えもあって、普段から敷居の低い寺院として心がけておりますので、檀家さんから様々な相談を受けることがあります。葬儀だけではなく、結婚、出産、名付け、進学、就職、転居、新築など人生の節目には必ずといって

いいほど参詣していただきます。

最近是一人親世帯も増えていきますので、学期が終わるたびに通知表を持ってくる子供も多くなりました。こちらは伸びたところを発見してほめてあげるのが役目です（笑）。また年に4回ほど子供たちの宿泊研修を行います。小さなお寺なのにシャワー室もあるんですよ。

また高齢の檀家さんには日常の困ったことは遠慮なく伝えてくれるように、檀家の方とお子さんの世代にも緊急連絡先を伝えてあります。高齢者世帯では一緒に大物の買い物に出かけたり、電球を取り替えたりもしていますね。

――調べてみてわかったことはどのようなことでしたか？

樋口：頭の中で大体の把握が出来ていたつもりでしたが、実際に名簿を目を通してみると見落としや、子供の転勤や家族との離別などの環境の変化に気付いていなかった世帯もあったりと…改めて見直すことが出来て良かったです。

――それをもとにどのようなことをされましたか？

樋口：把握した名簿を元に一人暮らしの方々にお電話を差し

上げました。参加された方はもちろん、参加されなかった方からも近況を聞くことが出来、「お気遣いいただきありがとうございます」と何度も言われました。

電話一本でこんなに喜んでいただけるならこれからも続けていきたいと思いましたね。

そして翌月の日曜日に昼食会を開きました。近隣の檀家さんに送迎をお願いして、約20名ほどが役員さんと一緒に集まり楽しい催しになりました。

――檀家さんからはどのような反応がありましたか？

樋口：それが、こちらがお招きしておもてなししようと張り切って臨みましたが、一人暮らしの方々がお接待側に立ちたかったようで、笑顔で生き生きと参加者全員に振舞われ、「お上人様、座っとなって〜！ここは（私が）やるけん」と逆にお世話になったような感じで、役員一同苦笑いでした。一人暮らしの方はお世話される事よりもお世話する方が喜びが大きかったようでしたね。

――今後に向けて反省や教訓は得られましたか？

樋口：時と場合にもよりますが、参詣の時に皆がかしこまるだけのお寺ではなく、色々な悩みを持っておられる檀家さんとのご縁を大切にして、普段から何でも話せる、何でも聞ける関係になっていけば、寺院は皆の心の拠り所になれると思っています。また良いと思ったことは先ず実行してみようと言う事です。皆に理解していただくためには日常が大切でイベントよりも日々の行いが大切だと感じております。そうしないと説得力もありませんから。

――ご自分の経験について、現在、未来の臨床宗教師の人達に伝えとしたりしたらどんなことがありますか？

樋口：私が知り得た臨床宗教師の方々は現状を改善しようとする勇氣、他者に対しての慈しみ、そして周囲に流されない真面目さを持たれた方ばかりでした。日常の法務の中でも触れ合う人には沢山の悩みや苦しみがあります。催し物だけではなく普段から実行できることがまわりには沢山あると思います。

出来ない理由に逃げず、現状に負けず、小さなことでもコツコツと続けていけば、きっと宗教者としての自分の人生も花が開くものと信じております。見るもの聞くもの感じるものが全て行であります事を心から願っております。

合掌



各地の動き

臨床宗教師会各地方支部の動向

臨床宗教師会各支部の動きをお伝えします。現在、沼口医院・臨床宗教師の田中至道さん（5期生）を事務局にして、中部支部の発足が検討されています。

北海道・東北支部

◆10月1日（金） 於曹洞宗洞林寺
北海道・東北支部発足準備会
参加者：10名（予定）

◆活動予定

11月 支部発足式 一泊研修 カフェ・デ・モンクin気仙沼

関西支部定例会

◆第4回 4月25日（金） 於ビハーラ21総本部
参加者：吉田師(1期)、羽富師(2期)、ビハーラ関係僧侶4名（大谷派3、本願寺派1）、上智大学グリーンケア研究所修了生2名、スピリチュアルケア専門職1名、三浦（ビハーラ21）、他一般約20名、計約30名
内容：参加僧侶及びスピリチュアルケア職各自活動報告、御入仏（開眼）法要

◆第5回 5月23日（金） 於ビハーラ21総本部
参加者：米本師（2期）、上智大学グリーンケア研究所修了生1名、三浦（ビハーラ21）、他一般3名、計6名
内容：参加者全員の活動報告及び感想発表



5月29日、読売テレビ「かんさい情報ネットten」
「広がる「臨床宗教師」という仕事」

◆第6回 6月27日（金） 於ビハーラ21総本部
参加者：ビハーラ関係僧侶2名（大谷派1、曹洞宗1）、三浦（ビハーラ21）、他一般7名、計10名
内容：参加僧侶活動報告、臨床宗教師包括組織発足の検討

◆第7回 7月25日（金） 於ビハーラ21総本部
参加者：佐々木師（2期）、ビハーラ関係僧侶1名（曹洞宗1）、三浦（ビハーラ21）、他一般1名、計4名
内容：参加僧侶活動報告、寺院内福祉住宅建設の検討

九州支部

◆4月12日（土） 於真宗大谷派浄玄寺
フォローアップ研修（会話記録、講師：谷山洋三）

◆5月17日（土） 於日本福音ルーテル大江教会
第2回臨床宗教師入門講座
講師：伊藤文雄先生「臨床宗教師の理念」
内容：伊藤先生講演とグループワーク、意見交換
参加者：吉尾天声、糸山公照、緒方宏明(SV)、立野泰博(SV)の執行部4名と報道関係者を含め33名。内訳は（宗教者11名、医療関係4名、福祉関係2名、一般15名）

◆6月14日（土） 於浄土真宗本願寺派熊本別院
ビハーラ熊本研修会
糸山公照（講演）「臨床宗教師という考え方と活動」

◆7月5日（土） 於日本福音ルーテル大江教会
フォローアップ研修（会話記録）

◆9月6日（土） 於日本福音ルーテル大江教会
カフェ・デ・モンク準備会議

◆9月17日（水） 於日本福音ルーテル大江教会
臨床宗教師入門ミニ講座（谷山洋三講師）



◆活動予定

10月4日 カフェ・デ・モンクINくまもと

11月8日 熊本県訪問看護研修 講演会

11月13日 日本尊厳死協会くまもと 講演会

12月6日 御幸病院 講演会



熊本日々新聞7月13日

活動報告

《2014年度後期開講科目》※ 受講者数は未確定

授業名：グリーフケア論

担当者：谷山洋三

内容：悲嘆とその対応の一つとしてのグリーフケアについて基礎知識を得る

授業名：臨床死生学

担当者：谷山洋三

内容：(1)医療・福祉の臨床における死に関する諸問題について学ぶ (2)様々な死生観を通して、自分自身の死生観を涵養する

授業名：宗教と心理療法

担当者：高橋原

内容：心理療法という観点から宗教を考える視点を学ぶ。

授業名：実践宗教学試論（大学院・学部共通科目）

担当者：鈴木岩弓・谷山洋三・高橋原

内容：臨床宗教師研修での講義内容を一般学生に向けて紹介するという趣旨のオムニバス講義。ゲスト講師を招いて行なう。

日付	担当者	題目
(10 / 2)	鈴木岩弓	臨床宗教師の理念
(10 / 9)	奥野修司	岡部健医師と臨床宗教師構想
(10/23)	小西達也	臨床宗教師の倫理
(10/30)	谷山洋三	グリーフケアと宗教
(11 / 6)	金田諦應	カフェ・デ・モンク
(11/20)	鈴木岩弓	民間信仰論
(11/27)	谷山洋三	宗教的ケア／スピリチュアルケア
(12 / 4)	木村敏明	宗教間対話
(12/18)	相ノ谷修通	臨床宗教師の活動と公共性
(1 / 8)	三浦紀夫	福祉施設におけるスピリチュアルケア
(1 / 15)	高橋 原	被災地の幽霊と宗教者の対応について

《発表・講演》

4月10日 谷山洋三「電話相談とグリーフケア」「心の相談室」電話相談勉強会、仙台市民活動サポートセンター

4月24日 谷山洋三「スピリチュアルケアと宗教的ケア—東北大学大学院における臨床宗教師研修」龍谷大学大学院実践真宗学研究科主催 東北大学大学院の協力による「臨床宗教師研修」開設記念シンポジウム「臨床宗教師の可能性」、龍谷大学大宮学舎

4月25日 鈴木岩弓「東日本大震災後の怪異現象」真宗大谷派教学研究所「震災と原発」研究班

5月12日 鈴木岩弓「東北大学における臨床宗教師構想—東日本大震災から超高齢多死社会へ—」龍谷大学大学院実践真宗学研究科 公開特別講義講師

5月19日 鈴木岩弓「東北大学実践宗教学寄附講座の取り組み」WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会 復興に向けた宗教者円卓会議in仙台

5月23日 鈴木岩弓「現代日本人の死生観—仙台市公営墓地の墓石調査—」（加齢医学研究所スマート・エイジング・カレッジ講習会講師）

5月23日 高橋原「臨床宗教師に未来はあるか？」BBA!!勉強会、青松寺

5月31日 鈴木岩弓「民間信仰にみる文字の“ちから”」印度学宗教学会第56回学術大会：公開講演招請講師、種智院大学

6月4日 谷山洋三「よくわかる 死生観と日本のスピリチュアルケア」ぽぽぽねっと第1回いのちの学校、ぽぽぽのいえ（小松市）

6月5日 谷山洋三「宗教者による心のケア」真宗ビハーラの会石川、金沢真宗会館

6月6日 谷山洋三「最期まで豊かに生きるために」オレンジホームケアクリニック【在宅医療虎の穴】特別講演、福井県国際交流会館

6月7日 鈴木岩弓「震災被災地にみる死者と生者の接点」日本口承文芸学会第38回大会：公開講演会招請講師、東北大学川内キャンパス

6月11日 Hara Takahashi, “How Buddhist Monks Deal with So-called Occult Phenomena in Disaster Areas after 3.11: From the View Point of Grief Care.” at ICGB2014, Hong Kong Univ.

6月12日 Takafumi Morita and Yozo Taniyama, “‘Nuno-jizo’ as a Tool for Grief Care: Case Studies of Survivors of the Great East Japan Earthquake,” at ICGB2014, Hong Kong Univ.

6月13日 Yozo Taniyama, Hara Takahashi, Iwayumi Suzuki, “New Education Program for Rinsho-shukyo-shi (Japanese-style Interfaith Chaplain) started after the Great East Japan Earthquake,” at ICGB2014, Hong Kong Univ.

6月21日 高橋原「心のケアと伝統宗教の力」國學院大學研究開発推進機構主催、渋谷区教育委員会共催、第40回日本文化を知る講座「見直される伝統宗教」、國學院大學

6月29日 鈴木岩弓・松尾剛次・菊地和博（鼎談）「東北・山形における死と鎮魂と再生」平成26年度山形学フォーラム、遊学館ホール

7月2日 高橋原「宗教者に求められる心のケア」龍谷大学大学院実践真宗学研究科特別講義、龍谷大学大宮学舎清風館

7月12日 鈴木岩弓「「臨床宗教師」の社会実装—震災被災地から超高齢多死社会へ—」日本ホスピス在宅ケア研究会in神戸：招請講演講師、神戸ポートピアホテル

7月13日 谷山洋三「臨床宗教師は何を目指すのか」第22回日本ホスピス在宅ケア研究会全国大会in神戸、シンポジウム「臨床宗教師の可能性」、神戸ポートピアホテル

9月4日 谷山洋三「ビハーラ僧のスピリチュアルケア」鶴見大学先制医療研究センター「終末期医療を支援する臨床宗教師の育成事業」、総持寺

9月6日 谷山洋三「臨床宗教師研修の特徴」第7回日本スピリチュアルケア学会学術大会プレパネル、上智大学

9月7日 谷山洋三「公共空間における宗教的ケアのプロセス」第7回日本スピリチュアルケア学会学術大会、上智大学

9月9日 谷山洋三「宗教者による心のケア」無限洞、泉ヶ岳やまぼうし（仙台市）

9月12日 谷山洋三「在宅医療における死生学—スピリチュアルケアと宗教的ケア—」第6回「ほっと」在宅会、徳養寺本堂（大垣市）

9月13日 谷山洋三パネル「被災地における心霊体験とその意味について」コメンテーター、第73回日本宗教学会

9月15日 谷山洋三「臨床宗教師と医療者の連携は可能か？—看取りのための環境整備—」NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク 第20回記念大会全国の集いin岡山 ランチョンレクチャー、岡山コンベンションセンター

9月17日 谷山洋三「臨床宗教師とは」臨床宗教師会九州支部ミニ講義、日本福音ルーテル熊本大江教会

《論文・寄稿》

谷山洋三「臨床宗教師研修の報告」『故岡部健先生追悼緊急シンポジウム報告集 医師岡部健が最後に語ったこと』心の相談室、2014年3月、49-56頁

谷山洋三（まとめ役）「『東北大学実践宗教学寄附講座』受講者体験発表」『みやぎ宗連報』40号、宮城県宗教法人連絡協議会、2014年3月、7-12頁

谷山洋三「苦悩に寄り添う『臨床宗教師』」『北國新聞』2014年4月10日朝刊

鈴木岩弓・柳田邦男（対談）「医師にはできない心のケア 人はなぜ『幽霊』を見るのか」『文藝春秋』第92巻10号、2014年8月、338-345頁

谷山洋三「（シンポジウム）第2部 これからの日本的ターミナルケアの在り方を改めて探る 宗教者・宗教の果たす役割」『日本のターミナルケアを問う 長岡発ビハラー・ターミナルケア20年！』医療の心を考える会パート3・医療法人崇徳会長岡西病院編著、考古堂、2014年5月、122-130頁

谷山洋三「スピリチュアルケアの担い手としての宗教者：ビハラー僧と臨床宗教師」鎌田東二編『講座スピリチュアルケア学1 スピリチュアルケア』ピング・ネット・プレス、2014年9月、125-143頁

Yozo Taniyama, 12. Chaplaincy Work in Disaster Areas: Potential and Challenges, in Religion and Psychotherapy in Modern Japan, C. Harding, F. Iwata, S. Yoshinaga eds, Routledge, 2014.9, pp. 250-266.

高橋原「幽霊を見たという人に僧侶はどう向きあうか」『月刊住職』2014年5月号、102-109頁。

高橋原「霊に取り憑かれた人に僧侶はどう向きあうか」『月刊住職』2014年6月号、108-115頁。

《新聞報道等》

中外日報（2014年4月4日）
社説 アウェーこそホームだ 現場で教えを確認

佼成新聞（2014年4月6日）
インタビュー 東北大学大学院教授 鈴木岩弓さん

北國新聞（2014年4月10日）
苦悩に寄り添う「臨床宗教師」
多様な価値観受け入れ 被災地や病院、在宅で

河北新報（2014年5月9日）
研究者の思い 臨床宗教師
信仰の枠を超えケアを 講座開設心構え説く

読売新聞夕刊（2014年5月13日）
お坊さんは悩み「聞き屋」
病院や施設出向き 信者以外にも寄り添い
傾聴の人材育成活発化 大学など
熊本日々新聞（2014年5月16日）
心のケア学ぼう「臨床宗教師」入門講座（熊本支部）

朝日新聞京都版（2014年5月24日）
苦しむ人の心のケア 龍谷大院がプログラム
育て 寄り添う宗教者 東北大と連携 被災地で実習
OB「悩みの共有大切、わかった」

河北新報（2014年5月25日）
魂の救済心構え学ぶ 石巻で臨床宗教師研修会

中外日報（2014年6月4日）
枠を超え臨床宗教師研修 東北大と龍谷大が共同で

中外日報（2014年6月4日）
宗教法人格で訪問介護 大阪市で初、7月開設へ
浄土真宗単立・西栄寺

中外日報（2014年6月6日）
BBA!!勉強会 臨床宗教師の今後を考える

仏教タイムス（2014年6月12日）
BBA勉強会
「臨床宗教師」講座担当者招き "アウェイ"での活動学ぶ

中外日報（2014年6月25日）
総持寺修行僧を対象に臨床宗教師育成 鶴見大
日本版チャプレン 宗門系で関心高まる

中外日報（2014年6月27日）
臨床宗教師を報告 仏教者の社会参シンポ 鶴見大仏教文化研

熊本日々新聞（2014年7月13日）
臨床宗教師として活動する僧侶 糸山光照さん
宗教だから救えることも

医療経営CB news（2014年5月19日）
医療と宗教の垣根を越えて(1)
医療の現場へ、動き出した「臨床宗教師」

医療経営CB news（2014年5月21日）
医療と宗教の垣根を越えて(2)
龍谷大学でも養成開始、広がる「臨床宗教師」

医療経営CB news（2014年6月2日）
医療と宗教の垣根を越えて(3)
医療・介護に宗教者がいるということ

中外日報（2014年7月9日）
臨床宗教師広めたい 九州支部第2回講座

中外日報（2014年7月9日）
ビハラー21 臨床現場を支援
新法人を設立 宗教師など孤立防ぐ

河北新報（2014年7月26日）
臨床宗教師 養成の場広がる 宗派を超え 傾聴を実践
布教目的とせず 医療現場に従事

文藝春秋（2014年8月号）
（大型企画「死と看取り」の常識を疑え）
医師にはできない心のケア
人はなぜ「幽霊」を見るのか 柳田邦男／鈴木岩弓

中外日報（2014年8月8日）
傾聴喫茶「カフェ・デ・モンク」 熊本でも開店 年内に
寄り添いは宗教者の役割 臨床宗教師会九州支部

寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。主な寄附者の方々にここに記し感謝申し上げます。

日本基督教団

南西ドイツ宣教会

(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)

宮城県宗教法人連絡協議会

日本ナザレン教団

宗教法人みんなの寺

融通念佛宗音羽山観音寺

浄土真宗本願寺派真覚寺

真宗大谷派常念寺

天台真盛宗新光寺

天台真盛宗西念寺

融通念佛宗西方寺

曹洞宗島田地蔵寺

真言宗智山派大聖寺

日蓮宗実相寺

日蓮宗妙興寺

秩父神社

神習教

念法真教

日蓮宗立像寺

匿名

公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会

日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室

財団法人東北ディアコニア

特定非営利活動法人神道国際学会

特定非営利活動法人世界開発協力機構

立正佼成会一食平和基金

一般財団法人ありがとインターナショナル

真如苑

当講座は、全日本仏教会の「推薦団体」、日本宗教連盟の「後援団体」として認定を受けています。

ご寄附のお申し込みにつきましては下記までお問い合わせください。なお、寄附金には法人税法・所得税法による税制上の優遇措置があります。

東北大学文学研究科内実践宗教学寄附講座

TEL: 022-795-3831(FAX兼)

E-mail: j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

編集後記

実践宗教学寄附講座が当初予定していた設置期間である三年目も半ばを超えました。巻頭にも記したとおり、臨床宗教教育ネットワークが発足し、ケアに関わる宗教者の教育と研究を行なう機関同士につながりが出来つつあります。また、臨床宗教師会などを通じて、現場同士の結びつきも始まっています（臨床宗教師会はFacebookにもページを開設しました）。

もちろんこれらの枠組みや器があるだけでは何も進みません。現場に立つ宗教者ひとりひとりの行動が全体の流れを作っていくのだと思います。今年七月には臨床宗教師研修1期生の吉田敬一さん、宇崎大輔さんの所属する大阪の西栄寺が、宗教法人格では初めて、訪問介護事業の認可を受けました。初めての入浴介護など戸惑いながら頑張っているようです。

現場の皆様の動きとも連動しつつ、寄附講座は来年度以降も継続できるよう努力を続けています。引き続き、ご支援とご理解をたまわりますようお願い申し上げます。（た）



東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第6号

編集・発行 東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座

2014年10月1日（第1刷）

（このニュースレターは右記ホームページからも閲覧できます。）

実践宗教学寄附講座運営委員会

学内委員

鈴木岩弓 実践宗教学寄附講座教授（兼任）

谷山洋三 実践宗教学寄附講座准教授

高橋 原 実践宗教学寄附講座准教授

学外委員

金田諦應 通大寺住職（委員長）

井形英絵 日本バプテスト連盟南光台キリスト教会牧師

伊藤文雄 元ルーテル神学校教授

金沢 豊 浄土真宗本願寺派総合研究所研究員

川上直哉 (財)東北ディアコニア理事長

小西達也 武蔵野大学教授

櫻井恭仁 心の相談室理事（財務担当）

佐藤央千 竹駒神社権禰宜

篠原祥哲 (公財)世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
仙台事務所所長

松山宏佑 昌林寺住職

宮崎正美 仙台白百合女子大学教授

伏見英俊 智山伝法院非常勤教授

篠原鋭一 長寿院住職（顧問）

（事務補佐員）佐藤千尋

980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27-1

東北大学文学研究科内

実践宗教学寄附講座

022-795-3831(T/F)

j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/



東北大学